

# デューイと大正デモクラシー

岡本珠代

はじめに

日本が第二次世界大戦後に民主主義の受容を迫られた時、再認識されたデューイの民主主義論も、その四半世紀前のデューイ来日講演の折りには、大正リベラル達に訴えることが少なかつた。大正デモクラシーの主な担い手たちは時代の政治的情勢の影響により、哲学的にはドイツ観念論と宗教的にはキリスト教信仰に立ちながら、天皇制と帝国主義とともに容認する姿勢を取り、その点での妥協を認めないデューイとの間に溝が深まった。

一 デューイの大正デモクラシー観

ジョン・デューイ(一八五九—一九五二)は、一九一九(大正八)年二月九日来日、東京大学、早稲田大学等で講演を行い、四月

二八日には離日して、中国に向かった。一九一九年の日本は「デモクラシー運動が最高潮に達」し、三月一日に開催された「普通選挙期成同盟主催の普選促進国民大会には、商人・番頭・職工・サラリーマンの各世代の民衆約五万人が参加し、約一万人が国会議事堂まで進行した」<sup>(1)</sup>。デューイ夫妻はこのデモ行進を目撃したという。

デューイの東大での講演は、*Reconstruction in Philosophy*と題して行なわれ、講演録は翌年にアメリカで出版された。鶴見俊輔によると、初回約千人を集めた連続講演は、回を追うごとに聴衆の数が減り、最後にはわずか三、四十人になっていた。他大での講演でも、何の新味もないと批判する聴衆が多かった。<sup>(2)</sup>

日本と中国に滞在中に妻のアリスとともにアメリカにいる子供たちに送った手紙の中で、デューイは日本の要人や学者から下へ

もおかぬもてなしを受けたことを当惑気味で記しているが、中国に渡ってからは、書簡の内容は日本批判を強めたものになった。

デューイが一九一九、二〇年に発表した講演録や評論は三十余編の多きを数えるが、滞日中の体験を書いた「日本におけるリベリズム」という評論は、日本の政治・経済・文化的状況をかなり的確に捉えている。その内容を要約すると、次のようになる。

「第一次世界大戦参加によって日本の経済は農業から鉱工業に転換したが、日本は労働問題について西洋の経験から学ぶことなく、劣悪な労働条件、小児・女性労働、不衛生な労働・生活環境に何の対策も持ちあわせていない。一九一九年の現時点では原敬内閣はあいまいな姿勢で労働組合を禁止も合法化もしていない。

知識人の中には昔ながらの儒教的な〈仁〉の原理で労使関係を処理していけると考える人々がいるが、西洋思想の影響を受けたリベラルたちにとって〈仁〉の原理は封建思想の名残りにすぎず、労働者は自分達の権利を主張すべきだと考えている。現実には、仁政論者たちの意図に反して、米騒動が〈労働と階級意識の始まりへの導火線〉となった。米の値段が高騰し、ストライキが蔓延し、労働問題は行き詰まっている。禁止されている社会主義への関心が特に大学で高まり、ある私立大学では社会主義に関する講義の開講の要望が高かった。デモクラシーについては東京大学でも学生達が『デモクラシー』という雑誌を

発行し、教員達も〈黎明会〉(一九一八年に吉野作造、新渡戸稲造、大山郁夫らが作り、一九二〇年に解散―筆者注)という協会を作りデモクラシー思想を広めている。『改造』や『新社会』といった雑誌が毎月のように誕生している。

一方、リベラルグループの一派は、天皇制に関してデモクラシーと折り合いをつけるように努めている。彼らが言うには、天皇は伝統的に人民の福利にこの上ない関心を持つ人民の父なのであり、〈人民のための〉政治を行っているという点では日本は歴史的に民主主義国だった。悪いのは天皇と人民の間に割り込んできた寡頭政治家達なのである、と考えている。(ちなみに、これは〈民本主義〉を標榜していた吉野作造らの主張への言及である―筆者注)

西洋人は日本の神道も神政政治も本気で取り上げようとしないうが、日本では天皇統治の神話が政治の根幹にすえられ、日本人の生活の隅々まで徹底周知されている。三つの神話が中心神話を支えている。第一は、日本民族の均質性である。修身の教科書では、他国にも愛国心と親孝行はあるが、この二つが全く一致しているのは日本国のみである、とある。第二の神話は、皇統が過去二千五百年以上も連続と途絶えることなく続いてきたとの主張である。第三の神話は、上記二つの神話の総合として、日本民族の繁栄は一にかかって、国を開いた(皇祖・皇宗)たちの諸徳の賜物である、との主張である。それゆえ、皇

統の歴史と修身は学校の必修科目であり、直系の末裔たる現人神の（御真影）は死を賭しても守らねばならない、と信じられている。

しかし、このように反動的な思想状況ながら、大学内ではデモクラシー思想が育つてもある。現に、日本の大学生のグループが北京にやって来て、日本の対中国政策を批判し、共通の敵は日本の軍事独裁体制だと声明した。たしかに、日本のデモクラシー機運は後退しているが、日本人の知的柔軟性からよい変化が流血を見ずに起こることも期待できる。」

このようにデューイは、中国滞在の初期に書いた評論の中で日本のデモクラシー運動の状況を述べた。彼は一九一九年五月に〈五・四運動〉を経験したが、鶴見は次のように述べる。「デューイの中国滞在中の一九一九年五月四日に、国立北京大学の学生たちは、中国にたいする日本政府の影響に反対するデモをはじめた。〈五・四運動〉と呼ばれるこの抗議は、さらにはつきりした形をとって、長くつづく日本の武力侵略をはねのけて中国の独立をかちとる、ほとんど三十年にわたる共同の努力のさががけとなった。」

デューイは二年後に中国からの帰国途中、日本に立ち寄り、その時の経験を雑誌『ニュー・リパブリック』三六三号に「日本における世論」と題して発表した。彼は、ある日本人リベラルと中国人教育者の対話を最初に紹介している。その日本人は日本の対

中国政策に批判的なのだが、それでも隣接する日本と中国は特別の関係なのだから、日本が中国にもつ関心は当然であると主張したことに對し、相手の中国人が反論して、日本は自国の問題の解決に腐心すべきだ、日本も中国も深刻な問題を抱えているが、中国の問題は世界に知れ渡るのに、日本の問題は隠蔽されているところが問題なのだ指摘して、相手を黙らせたという。

デューイはさらに次のように述べる。中国では政府が弱体で腐敗しているから、かえって世論が旺盛である。反動軍事派閥が外交を除く政府の実権を握っているが、彼らは知識人ではなく、儒学にも無縁である。一方、教育者階級は政府批判で一致しており、だれもがリベラルで社会の近代化に熱心である。ところが、日本では中央集権政府が強大であるから世論の形成が難しく、批判的思考は憶病で守勢にまわっている。愛国心は一個の宗教であるだけでなく、宗教が文字通り愛国主義、国家主義なのだ。愛国主義と制度化した宗教は、批判的思考や自由な討論を嫌悪する。日本ほど、反政府批判をするのに勇氣のいる国は世界のどこにもない。それだけに、自分が滞在していた二年前に比べて、今回の再度の訪日で少し上向きの変化が見られたのは日本のリベラルたちの勇氣と努力の成果であろう。

デューイはまた、日本の民主化には外国の民主勢力の世論が必要であることも示そうとした。天皇と軍と官僚機構ががっちりし、対外的な戦争のたびに強くなる国家の政治に民主的な性格をもち

こむことは困難である。リベラルでさえ、日本の陸海軍力のみが日本をインドや中国と同じ運命をたどることから救ったのだと信じ、黄色人種への差別と闘うには軍と組むことも辞さないと言う。日本の世論の民主化のためには、諸外国のアジア人差別が撤廃され、移民政策の公正さが優先されるべきだ、そうすれば軍部が世論を抑えることなく、リベラルで平和愛好的な世論が育つだろう、というのがデューイの主張であり、アメリカのアジア政策をも批判する内容をもっていた。

こうしたデューイの意識と大正デモクラシー運動当事者の意識の間には大きな落差があった。そこで、彼が日本の聴衆に提示したデモクラシー論の中心的主張を一瞥してみる。

## 二 デューイのデモクラシー論

『哲学の改造』の内容要約を各章ごとに列挙すると、(一) 観念論の否定、(二) 経験論の称揚、(三) 科学による自然支配、(四) 経験の自己創造性、(五) 観想から実践へ、(六) 道具主義の主張、(七) デモクラシーの意味、(八) 社会哲学の再構築、ということになる。デューイは、デモクラシー論の根幹をなす平等主義を哲学だけでなく科学論にも適用する。ギリシャ古典哲学もドイツ観念論も、哲学的には固定した目的論的宇宙観・自然観に立ち、上は尊く、下は卑しい上下の秩序を前提とする。だがペーコン以来の経験論は、人間が不動の目的に向かう宇宙の動きに受動的に従

うのではなく、自然に手を加え改造し意のままに従わせることができることを教えたので、宇宙論的大目的の代わりに自然の利用という目標を人間がもつことができるようになった。科学革命を経て近代科学が成立したが、哲学の改造とは新しい自然観に立つて思考の枠組を根本的に変えようとすることである。新しい思考の論理は、概念や観念や理論が、固定した秩序の表現ではなく、変化する現実や人間に障害となっている事実についての仮説であり、道具として問題解決に役立つかどうかによって、その正しさが検証される性質のものである。今も、古い観念論の残滓が哲学改造の動きを阻止しているが、それを一掃するのが二十世紀の知的課題である。

デューイは、封建制度から民主主義への変化が科学と政治の世界に平行して起こっているとみる。科学の封建制とは天上を支配する理念的な力を尊しとし、地上のものを動かす力を低級と見る見方であるが、科学革命によって、個別的な事象は平等で上下の差別のない民主主義的自然観に移行した。差別の撤廃と平等の実現が社会制度における近代の指標になったのと同様である。デューイは社会の成立過程の説明として、仮説としての社会契約説を受け容れ、それを成立させるものとしての政治的・宗教的・倫理的な個人主義を主張する。個人が諸種の封建的な権威から解放され、自分自身の良心・意見・表現の自由等の権利に基づいて行動する姿を描き出す。近代人は「自分で思考し、観察し、実験す

る」態度を身につけたが、これが民主主義の促進に役立った。

デュイの意味する民主主義は特定の政治形態ではなく、社会の全般に行なわれるべき自由で平等な意思決定のありようである。

それは、他者との偏見のない、共感的態度を持つことでもある。

デュイにとっての民主主義的な人間像は「豊かな共感、鋭い感受性、不愉快なことに直面した場合の不屈の態度、分析や決定の仕事を知行的に行うだけのバランスのとれた関心」の持ち主である。

民主主義的な人間の行為には固定した最終目的などはなく、学問でも実践でも具体的な人間の苦悩を発見するのに役立ち、それを救済して人生の苦痛を除去する計画の開発に役立つものが道徳的なものになる。固定した目的や静的な結果ではなく、成長や改良や進歩の過程が重要である。目的の完成ではなく、ある目的を完成させ仕上げる過程そのものが生きた目的となる。「成長そのものが、唯一の道徳的（目的）である。」そうになると、哲学の意味も変わってくる。哲学は悪の問題について、オプティミズムやペシミズム論争に陥る代わりに「別の義務を引き受ける——どんなに慎ましい仕方でも、人類の不幸の原因の発見を助ける方法に参与するという義務である。」

社会制度のもつ目標も、制度の統合性や秩序の維持が重要なのではなく、社会の成員である個人の能力を「人種、性、階級、経済的地位に関係なく」解放し開発することであり、制度の価値は各個人をその可能性一杯まで教育するか否かでテストされる。民

主主義的な生活態度とともに、すべての意思決定過程において、

平等で自由な形態が民主主義的生活を実現する手段となる。それには「コミュニケーション、共有、共同参加」が三大要素としてある。これらは目的と手段を固定化しないデュイが「道徳的な法則および目的を普遍化する唯一の現実的な道」と呼ぶものである。コミュニケーションの役割は大きく、「善はコミュニケーションによってのみ存し存続する。」ので、民主主義は何よりも参加民主主義といわれる形態を取って、社会の成員が問題解決と価値の創造にいたるまで共同作業に携わることが必須となる。ちなみに、共有は生産手段の共有ではなく意思決定手段の共有なのである。こうしたデュイのデモクラシー論は、日本では政治形態を論ずるデモクラシー（政治的デモクラシー）論だけでなく、社会や人間関係に関するデモクラシー（社会的デモクラシー）論に対しても刺激剤になったはずであるが、大正デモクラシー論争史の中で公認された形跡が見えない。

### 三 大正デモクラシーの民本主義

大正デモクラシー論は二百本以上の論文になって現れた。民本主義に関していえば、吉野作造の「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」と題する論文が代表的なものであるが、吉野のこの論文とわずか三年後のデュイ来日時に発表された同じく吉野の小論「デモクラシーと基督教」の間には顕著な変化が

ある。

吉野作造は右の「憲政の本義……」論文の中で、デモクラシーの意味に、主権在民と人民本位の政治の二つがあると認めた。しかし、前者は日本の君主国体にあわなない危険思想であり、政治は「国家の主権の基本的の目標は、政治上人民に在るべし」という意味で民本主義が適切なのであるとした。つまり主権の主体を問わずに、主権の行使の目的を確認する立場であるが、主権行使の目的は、人民の利益・幸福・意向にある。人民の意向を無視して、人民の利益のみはかるとするのは昔ながらのパターナリズムや王道思想に前例があるが、吉野は人民の意向を汲み上げることと理想とする政治という考えを盛り込み、民衆代表を含む代議員による議会政治の実現をめざす。

天皇制という国体はゆるぎないもので、主権在民を受け容れる余地はない、と考える吉野の民本主義はキリスト教信仰とも矛盾しない、「主権」観の妥協から来ている。吉野作造の「人間形成・思想形成は……キリスト教によってなされた……」とくに、信仰上の「師」である海老名弾正の人格的・思想的影響は見逃すことのできない要素である」との観察は少なくとも彼の著作によって裏付けられる。吉野は学生時代から海老名弾正の本郷教会の広報活動に熱心だった。吉野のみならず大正リベラルの多くがキリスト教を標榜した。彼らは西洋文明へのキリスト教の寄与を評価したが、唯一神教のキリスト信仰と天皇制を妥協させ、またキリ

スト教が天皇制と帝国主義の両者ともに両立するものであるとの見方をもっていた。

だが吉野は生涯を民本主義一辺倒で通したのではなく、デモクラシー観の軌道修正が試みられた。彼はデューイ来日中の一九一九年三月に、かつて自分が編集者をしていた本郷教会の機関誌『新人』に寄せた小論「デモクラシーと基督教」の中で次のように述べる。今までは、民主主義の政治的側面を強調してきたが、近ごろは家庭内で亭主が妻や女中を困らすようなことがあるとデモクラチックでないという風潮が生まれている、言葉の乱用かもしれないが、もはや政治だけに限ることはできなくなった。それでは、政治や倫理や教育に共通のデモクラシーの本質とは何か。それはカントの思想とも通ずる人格主義である。人格主義が働くには宗教的信仰の助けが必要だ。人格主義が生きている宗教といえればキリスト教である。キリスト教はすべての人、一人一人を神の子として尊重し、その信仰は社会の各方面に現れて直ちにデモクラシーとならざるを得ない。

こうして吉野によれば、人格尊重を共通項としてキリスト教とデモクラシーが直結する。そして、「デモクラシーの比較的最もよく行なはれて居るのは基督教の信仰の最も強き国に於てである。而して基督教的信仰が夫れ自身デモクラチック・スピリットとして、社会各方面のデモクラシーの徹底的実現を助長促進しつゝあることは疑を入れない」と言い、デモクラシーの進歩とキリスト

教精神の発達は相補的に進行すべきものとする。吉野はここでデモクラシーを政治制度に限定する従来の見解を改め、人間関係の基本的な姿勢を表現する「デモクラチック・スピリット」という用語を用いて、社会的デモクラシーに肩入れをする。ところで海外経験も豊かだった吉野が日常生活において内弁慶のデモクラシー論者であったか否かについて、友人の栗原基の娘の証言がある。それによると吉野は自分で繕いものを上手にこなす人であり、またひそかに不遇な留学生を援助する慈愛の人だった。ただし、女性には政治に向いていないという理由で参政権を認めない立場を取っていた。<sup>(15)</sup> ちなみにアメリカで女性の参政権が認められたのは一九二〇年のことである。

吉野と同じく民本主義をとなえ、のちに社会主義に転じた大山郁夫もまたキリスト教の影響を受けた思想家だが、吉野と同じころにデモクラシー観を改めている。以前に唱えていた「内に民本主義、外に帝国主義」スローガンの矛盾を反省し、一九一九（大正八）年八月号の『我等』に「社会改造の根本精神」を書き、その中で「デモクラチック・プリンシプル」を称揚し、また「知識階級と労働者」（『我等』大正八年九月号）を書いて労働者階級と知識人の協力関係を説いた。「社会改造の根本精神」<sup>(16)</sup>の中で、大山は世界大戦後に政治思想家たちが制度としてのデモクラシーから生活意識の根本である「デモクラチック・プリンシプル」に対して関心を寄せるようになった（大山の言葉では「内観的に傾い

た」事情を語っている。一方では、大戦後は表面的にはデモクラシーに代わって「改造」や「解放」というスローガンが掲げられるようになったが、デモクラシーの精神を深めようとしている人たちも少なからずいる。社会改造は「デモクラチック・プリンシプル」による以外にない。「デモクラチック・プリンシプル」とは、個人の政治的・社会的・文化的活動の機会を増大し、精神生活の自由発展を可能にし、「人間らしく生きる」ことを実現することを目的とする原理である。この大山の主張の趣意はデューイのデモクラシー論に酷似している。しかし、この評論で引証されているのはデューイではなく、バートランド・ラッセルである。ちなみに、アメリカでデューイの影響を受け、日本にブラグマティズムの紹介をしたとされる田中王堂（一八六七—一九三三）が一九一九年の『中央公論』七月号に発表した「徹底個人主義者の社会生活観」<sup>(17)</sup>においても言及されているのはバートランド・ラッセルなのである。

## むすび

——デューイのデモクラシー論再考

デューイは相手を責めない温厚な人であったと伝えられているが、そのデモクラシー論も多様な文化形態を容認する複眼的なアプローチを取る。だが彼が日本における講演を観念論への攻撃から始めたのは正攻法であったとはいえず、大正知識人には効果的で

はなかつた。非キリスト教徒であってもキリスト教に親しみをもちドイツ観念論に依拠する大正リベラルにしてみると、そのどちらにも批判的な態度を取るデューイに傾聴できなかったたのである。体制と結びついた日本型キリスト教とは無縁のプラグマティズムの立場から、天皇制と帝国主義について日本のリベラルたちの妥協の仕方を批判したことは彼に対する拒否反応の理由になつただろう。客観的には、大戦以降に高まりつつあった日本人の反米感情もデューイ敬遠につながつたかもしれない。また、のちに社会主義に傾斜した大正デモクラシー思想家は、国内の経済問題の重要性に圧倒されて日本の大陸政策に注意を払えなくなつていたことも事実であつただろう。結局、吉野らのデモクラシー観の軌道修正も実を結ぶことなく、政治の民本主義運動も潰えてしまった。

デューイのデモクラシー論は、差別と不平等のない自由な人間関係の間に行なわれる意思決定過程で常来实现されるべき原理であり、政治体制とその意思決定の場だけににとどまらず、人間の共同生活の全局面に適用される。その中で示される人間像は、年齢に関係なく一生成長し続け、能力の自己開発と社会の問題解決に積極的に携わる存在である。この人間観・社会観はカントのようなどイツ観念論の思想と両立しえないものではない。完全な平等が実現するデモクラティックな共同体では、カントのいう目的の国の共同体と同じく、人々が互いの人格を尊重して決して手段と

してのみ扱わず互いを生かしあう。ただし、近ごろ、デューイにからめても主張される Richard Rorty らの共同体主義論（いわゆるコミュニタリアニズム）はローカルな伝統のみを重んじ、自由で平等な人間関係や意思決定の過程を軽視し、グローバルな視点を持ちえていない点で、デューイの思想とは大きな隔たりがあることは確認しておく必要がある。

- (1) 太田雅夫『大正デモクラシー研究——知識人の思想と運動』新泉社 一九九〇年 p.13,17.
- (2) 鶴見俊輔『人類の知的遺産六〇 デューイ』講談社 一九八四年 p.85.
- (3) Dewey, John & Dewey, Alice. Letters from China and Japan. New York: E. P. Dutton & Co., 1920.
- (4) Dewey, John. "Public Opinion in Japan", in John Dewey: The Middle Works 1899-1924. Volume 11: 1918-1919. Carbondale, IL: Southern Illinois University Press, 1982. pp. 156-173.
- (5) 鶴見俊輔『人類の知的遺産六〇 デューイ』講談社 一九八四年 pp.106-07.
- (6) Dewey, John. "Liberalism in Japan", in John Dewey: The Middle Works 1899-1924. Volume 13: 1921-1922. Carbondale, IL: Southern Illinois University Press, 1983. pp.255-261.
- (7) デューイ、ジョン『哲学の改造』清水幾太郎・清水禮子訳 岩波文庫 一九六八年 p.46.
- (8) デューイ、ジョン『哲学の改造』清水幾太郎・清水禮子訳 岩波



- 文庫 一九六八年 p.154.
- (9) デューイ、ジョン『哲学の改造』清水幾太郎・清水禮子訳 岩波文庫 一九六八年 p.179.
- (10) 太田雅夫編『資料 大正デモクラシー論争史』全二巻 新泉社 一九七一年。
- (11) 吉野作造『岡義武編 吉野作造評論集』岩波文庫 一九七五年。
- (12) 太田雅夫『大正デモクラシー研究——知識人の思想と運動』新泉社 一九九〇年 p.93.
- (13) 吉野作造『近代日本思想体系一七 松本尊充編 吉野作造集』筑摩書房 一九七六年 pp.205-09.
- (14) 菊沢喜美子『思ひ出の父 栗原 基』(非売品) 一九六九年 p.22.
- (15) 吉野作造『婦人の政治運動』『新女界』一九一五年五月号『近代日本思想体系一七 松本尊充編 吉野作造集』筑摩書房 一九七六年 pp.44-49.
- (16) 大山郁夫『社会改造の根本精神』『我等』一九一九年九月号『近代日本思想体系三四 鹿野政直編 大正思想集Ⅱ』筑摩書房 一九七七年 pp.11-19.
- (17) 田中王堂『徹底個人主義者の社会生活観』『中央公論』一九一九年七月号『近代日本思想体系三四 鹿野政直編 大正思想集Ⅱ』筑摩書房 一九七七年 pp.65-81.
- (18) 野沢 豊『中国革命・ロシア革命への思想的対応』古田光・作田啓一・生松敏三編『近代日本社会思想史Ⅱ』有斐閣 一九六一年 p.45.

(おかもと・たまよ、哲学・生命倫理、

広島県立保健福祉短期大学教授)